

音読に取り組んでみましたか？どのような物語であるか、音読をしながら全体の様子をとりえ、簡単な感想をもちながら読み進められていたらよりよいです。

「帰りの道」では、視点という言葉が物語を読むキーワードになっています。

5・6年生で目指す（物語・小説などを）読む力は、想像を豊かにしながら読む力です。

キーワードは、登場人物の相互関係や心情

人物像や物語などの全体像

表現の効果

少し具体的（くわしく）にすると、

- ・ 登場人物どうしのかかわり
- ・ 心情の変化
- ・ 人物の考え方
- ・ 特色のある表現
- ・ 情景描写
- ・ 暗示性・メッセージ性のある表現

物語を深く読むときの技

- 物語の構成や、登場人物の心情などを深く味わうための読み方のポイントです。
- 登場人物の心情は、直接書かれていることもありますが、登場人物の互いの関係をもとにした行動や会話などを通して、暗示的に表現されている場合もあります。描写（会話文や行動、様子）から、内面にある深い心情を想像しましょう。

◇物語の構成◇

◇登場人物の心情◇

1 設定
物語全体にかかわる、「時（いつ）」
「場（どこで）」「人物（だれが）」
などについて説明している部分で
す。

*** 中心人物の紹介や性格、人物像やものの見方や考え方を読み取ります。**

2 展開
事件の始まり、物語の中となる出来事の始まり、「山場」に向かっていく部分です。

*** 中心人物のものの見方や考え方、心情の変わっていくところを読み取ります。**

3 山場
大きな変化が起こる、物語の中で最も重要な部分です。物語の中で、中心となる人物の心情や行動が大きく変わる場面でもあります。

*** 中心となる人物のものの見方や考え方、人物どうしの関係、心情が、最も大きく変わる場面です。どのように、いつ変わっていったのかということに気をつけて読み取ります。**

4 結末
「山場」で大きな変化が起こった後のことがえがかれている部分です。

この学習では、人物像と物語の山場を中心に読んでいきます。

教科書の最後「言葉の宝箱」のページ、このようにのっています。

視点・・・物語や詩において、語り手がどこからどの作品を見て語っているかということ。
その作品の登場人物に寄りそった視点から語ることもあれば、登場人物自身の視点から語る場合や、どの人物にもかたよらない視点から語る場合もある。

心情・・・登場人物が、心の中で思っていることや感じていること。

直接書かれているだけでなく、行動や会話、情景にも表れる。

教材文は、同じ出来事について、律と周也、二人の登場人物それぞれの視点で書かれています。違いに着目し、登場人物が互いの気持ちや感じていることを総合し、人物像をうらまえましょう。

★手がかりになりそうな叙述に線を引きまわしよ。それがうらえた人物像の根拠ことばになります。

1 律の視点

共通している出来事は？

2 周也の視点

放課後のさわがしい玄関口で、いきなり、周也から「よっ。」と声をかけられて、ときどきとした。

「あれ。周也、野球の練習は。」

「今日はなし。かんとく、急用だつて。」

うわばきをぬぎながら周也が言つて、くつしたにぽっかり空いた穴から、やんちゃそうな親指をのぞかせた。その指をスニーカーにおさめても、周也はなかなか歩きだそうとしない。どうやら、いつしよに帰る気のようにだ。

小四から同じクラスの周也。家も近いから、周也が野球チームに入るまでは、よくいつしよに登下校をしていた。なのに、今日のぼくには、周也と二人きりの帰りの道が、はたしなく遠く感じられる。

もたもたとくつをはきかえて外へ出ると、五月の空はまだ明るく、グラウンドに舞う砂ぼこりを西日がこがね色に照らしていた。

「ああ、腹へった。今日の夕飯、何かなあ。あしたの給食、何かなあ。」

「な、律。昨日の野球、見たか。」

「夏休みまで、あと何日だつたっけ。」

周也の話があちこち飛ぶのは、いつものこと。なのに、今日のぼくにはついていけない。まるでなんにもなかったみたいに、周也はふだんと変わらない。ぼくだけがあのことを引きずっているみたいで、一歩前に行く紺色のパーカーが、どんどんにくらしく見えてくる。

今日の昼休み、友達五人でしゃべっているうちに、「どっちが好き。」って話になった。「海と山は。」夏と冬は。「ラーメンとカレーは。」歯ブラシのかたいのとやわらかいの。は。「海。」みんなで順に質問を出し合い、「海」「海」「山」「海。」と、ぼんぼん答えていく。そのテンポに、ぼくだけついていけなかった。「どっちかなあ。」とか、「どっちもかな。」とか、一人でごによごによ言っていたら、周也が急にいらついた目でぼくをにらんだんだ。

「どっちも好きなのは、どっちも好きじゃないのと、いつしよじゃないの。」

先のがつたするどいものが、みぞおちの辺りにずきつとささった。そんな気がした。そのまま今もささり続けて、歩いて、歩いて、ふり落とせない。

返事をしないぼくに白けたのか、周也の口数もしだいに減つて、大通りの歩道橋をわたるころには、二人ですつかりだまりこんでいた。階段をのぼる周也と、ぼくとの間に、きよりが開く。広がる。ここ一年でぐんと高くなった頭の位置。たくましくなった足どり。ぼくより半年早く生まれた周也は、これからもずつと、どんなこともテンポよく乗りこえて、ぐんぐん前へ進んでいくんだらう。

はあ。声にならないため息が、ぼくの口からこぼれて、足元のかげにとけていく。どうして、ぼく、すぐに立ち止まっちゃうんだらう。思っていることが、なんで言えないんだらう。ぼくは海のこんなところが好きだ。山のこんなところも好きだ。その「こんな」をうまく言葉にできたなら、周也とちゃんとかたを並べて、歩いていけるのかな。

「どっちも好き」と「どっちも好きじゃない」がいつしよなら、「言えなかった」と「なかったこと」もいつしよになっちゃうのかな。考えるほどに、みぞおちの辺りが重くなる。

律の視点から見た周也

昼休み

周也の視点から見た律

何もなかったみたいになるまえば、何もなかったことになる。そんなあまい考えをすてたのは、校門を出てから数分後、最初の角を曲がった辺りだった。どんなに必死で話題をふっても、律はうんとすんとも言わない。背中に感じる気配は冷たくなるばかり。やつぱり、律はおこつてんだ。そりゃそうだ。

昼休み、みんなで話をしていたとき、はつきりしない律にじりじりして、「言わなくてもいいことを言った。軽くつつこんだつもりが、律の顔を見て、重くひびいてしまったのが分かった。まずい、と思うも、もうおそい。以降、絶対にぼくの顔を見ようとしないうるのことが気になつて、野球の練習を休んでまで玄関口で待ち伏せをしたのに、いざ並んで歩きだすと、気まずいちゃんもくいたえられず、また、べらべらとよけいなことばかりしゃべっている自分がいた。

「この前、給食でプリンが出てから、もうずいぶんたつよな。」

「むし歯が自然に治ればなあ。」

「山田んちの姉ちゃん、一輪車が得意なの、知ってたか。」何を言つても、背中ごしに聞こえてくるのは、さえない足音だけ。ぼくがしゃべればしゃべるほど、その音は遠のいていくような気がする。

ふいに母親の小言が頭をかすめたのは、下校中の人かげがあつちへこつちへ枝分かれして、道がすいてきたころだった。

「周也。あなた、おしゃべりなくせして、どうして会話のキヤッチボールができないの。会話っていうのは、相手の言葉を受け止めて、それをきちんと投げ返すことよ。あなたは一人でぼんぼん球を放っているだけで、それじゃ、ピンポンの壁打ちといつしよ。」

ピンポン。なんだそりゃ、とそのときは思ったけど、今、こうして壁みたいだまりこくつている律を相手にしていると、その意味が分かるような気がしてくる。たしかに、ぼくの言葉は軽すぎる。ぼんぼん、むだに打ちすぎる。もつとじつくりねらいを定めて、いい球を投げられたなら、律だつて何か返してくれるんじゃないか。

でも、いい球つて、どんなのだらう。考えたどたんには、舌が止まった。何も言えない。言葉が出ない。どうしよう。あわてるほどにぼくの口は動かなくなつて、逆に、足は律からにげるようにスピードを増していく。

無言のまま歩道橋をわたった先には、しかも、市立公園が待ち受けていた。道の両側から木々のこずえがたれこめた通り道。人声も、車の音も、工事の騒音も聞こえない緑のトンネル。ぼくはこの静けさが大の苦手だった。

正確にいうと、だれかといるときはちんもくが苦手だ。たちまち、そわそわと落ち着きをなくす。何か言わなきゃつてあせる。野球チームに入る前、律とよくいつしよに帰っていたころも、ぼくはこの公園を通りかかるたび、しんとした空気をかきまぜるみたいに、ピンポン球を乱打せずにはいられなかった。律のほうはちんもくなんてちつとも気にせず、いつだつて、マイペースなものだったけど。

人物像・・・物語全体を通してえがかれる、人物の性格や、ものの見方・考え方などの特徴を総合的にとらえたもの。
教科書P30の学習ページなども参考にして取り組んでみましょう。

★人物像をより深くとらえる手がかりは

- ・様子や心情
- ・人物が見ているもの・その表し方
- ・会話文や内心語（心の中で言っていること）
- ・情景を表す言葉

★人物像をより深くとらえるには

それぞれの場面で、二つの視点から比べて読む

「帰り道」は二つの視点で書かれているのでよりとらえやすい。

- ・昼休みの出来事
- ・二人ともだまりこんでしまったとき
- ・周也が一人でしゃべり続けているとき

人物像につながるような言葉は、「言葉の宝箱」にもありますが、「帰り道」で当てはまるようなものとして、例えばこのような言葉があります。

【人物を表す言葉】

熱意のある	率直	まっすぐ	もの静か	誠実	温かい	えんりょがち	未熟	たくましい
おおらか	おっとり	しんちよう	たのもし	気が弱い	陽気な	活発な	マイペース	
ゆつじゆつだん	ひかえ目	明るい	気弱	消極的	おんびよう	おっちょこちょい	おだやか	
友達思い	活発	あわてんぼう	おしゃべり	正直	落ち着きがない			

★律と周也の人物像を一文にまとめてみましょう。

ぴったりとあてはまる言葉があったら、人物を表す言葉などから選んで書いてみましょう。

律は

周也は

★人物像の根拠となる叙述を書きおぼえてみましょう。（教科書や前のページの文章に線をひいたもの）

● ● ● ● ● ● ● ●

● ● ● ● ● ● ● ●

★もしも「帰り道」が律と周也の二つの視点から書かれていなかったら、どんな人物像が浮かびますか？

1の律の視点だけだったら、
律は

2の周也の視点だけだったら、
周也は

【めあて】

律と周也の心情がどのように変化したか考え、その後の二人の関係を想像しよう。

二人の関係の変化をうらえ、自分の経験と重ねながら、感想にまとめてみよう。

物語の山場にあたる場面です。大きな変化が起こる、物語の重要な場面です。人物の心情や行動が大きく変わります。

★二人の関係の変化をうらえ、手がかりになりそうな叙述に線を引きましょう。

1 律の視点

市立公園内の遊歩道にさしかかったところには、ぼくは周也に三歩以上もおくれをとっていた。もうだめだ。追いつけない。あきらめの境地でぼくは天をおおいだ。信じがたいものを見たのは、そのときだった。

空一面からシャワーの水が降ってきた。

もちろん、そんなわけはない。なのに、なぜだかどっさにプールの後に浴びるシャワーがうかんだのは、公園の新緑がふりまく初夏のにおいのせいかもしれない。

「うおっ。」

「何これ。」

頭に、顔に、体中に打ちつける水滴を雨と認めるのには、少し時間がかかった。晴れているのに雨なんて、不自然すぎる。ぼくと周也はむやみにじたばたし、意味もなくとんだりはねたりして、またたく間に天気雨が通り過ぎていくと、たがいのぬれた頭を指さし合って笑った。

本当に、あつというまのことだったんだ。ざざつと水が降ってきて、何かを洗い流した。周也の気どった前がみがぺたつとなつたのがゆかいで、ぼくはさんざん腹をかかえ、気がつくくと、みぞおちの異物が消えてきた。

単純すぎる自分はずかしくなつたのは、笑いの大波がひいてからだ。うっかりはしゃいだぼくの悪さをかくすように、ぼくはすつと目をふせた。アスファルトの水たまりに西日の反射がきらきら光る。そのまぶしさに背中をおされるように、今だ、と思つた。今、言わなきゃ、きつと二度と言えない。

「ぼく、晴れが好きだけど、たまには、雨も好きだ。」

勇気をふりしぼつたわりには、しどろもどろのたよらない声が出た。

「ほんとに両方好きなんだ。」

周也はしばしばたきを止めて、まじまじとぼくの顔を見つめ、それから、こつくりうなづいた。周也にしてはめずらしく言葉がない。なのに、分かってもらえた気がした。

「行こっか。」

「うん。」

ぬれた地面にさつきよりも軽快な足音をききんで、ぼくたちはまた歩きだした。

2 周也の視点

そつと後ろをふり返ると、やつぱり、今日も律はおつとりと一歩一歩をきざんでいる。まぶしげに目を細め、木もれ日をふりあおぐしぐさにも、よゆうが見てとれる。ぼくにはない落ち着きっぷりに見入っていると、とつぜん、律の両目が大きく見開かれた。

なんだ、と思う間もなく、ぼくのほおに最初の一滴が当たった。大つぶの水玉がみるみる地面をおおっていく。天気雨——頭では分かっているが、空からじゃんじゃん降ってくるそれが、ぼくの目には一しゅん、無数の白い球みたいにつつたんだ。

ぼくがむだに放ってきた球の逆襲。「うおっ。」と思わずとび上がった。後ろからも「何これ。」と律の声がして、ぼくたちは全身に雨を浴びながら、しばらくの間ばたばたと暴れまくった。はね上がる水しぶき。びしょぬれのくつ。たがいのあわてっぷり。何もかもがむしようにおかしくて、雨が通り過ぎるなり、笑いがあふれだした。律もいっしょに笑ってくれたのがうれしくて、ぼくはことさら大声をほり上げた。

はつとしたのは、爆発的な笑いが去った後、律が急にひとみを険しくしてつぶやいたときだ。

「ぼく、晴れが好きだけど、たまには、雨も好きだ。」

ほんとに両方、好きなんだ。」

たしかに、そうだ。晴れがいいけど、こんな雨なら大かんげい。どっちも好きってこともある。心で賛成しながらも、ぼくはとつきにそれを言葉にできなかった。こんなときにかぎって口が動かず、できたのは、だまっとうなずくだけ。なのに、なぜだか律は雨上がりみたいなのがおにもどって、ぼくにうなずき返したんだ。

「行こっか。」

「うん。」

しめつた土のおいがただようトンネルを、律と並んで再び歩きだしながら、ひよつとして——と、ぼくは思った。投げそこなつた。でも、ぼくは初めて、律の言葉をちゃんと受け止められたのかもしれない。

★視点のびびり書きの感想にまとめてみよう。

- 律と周也の言動や考え方、二人の心情の変化を、自分の経験と重ねながら感想をまとめてみよう。
- 言葉の使い方や表現で、特に印象に残っていること
- 視点を変えて書かれた構成によって、物語にどんな効果が表れているか